



このコーナーでは、水資源機構の環境保全の取り組みを紹介します。

阿木川ダム湖の「陸封アユ」

(1) 魚類(アユ)の陸封

ダム設置にともなうダム湖の生成は、ダム上流河川においては、河川流速を減速させることとなり、河床土砂の堆積状況に変化を生じさせます。こうした河床土砂の変化は、アユや在来^{ざれま}のフナ科にとって新たな産卵床となり得る砂礫河床を生じ、ダム湖が海の代わりに役目を果たし陸封されることがあります。

また、貯砂ダムがあっても遡上できる魚道があり、ダム湖のプランクトンがある程度豊富であれば、ダム湖流入河川の産卵床で孵化した仔アユは、秋から冬にかけてダム湖で遊泳し、春には流入河川へ遡上するようになります。このようなアユを「陸封アユ」といいます。

(2) 阿木川ダムの陸封アユ

阿木川ダムでも陸封アユが確認されています。地元の恵那漁業協同組合は、阿木川貯砂ダム及び岩村川貯砂ダムの魚道内での採捕について、岐阜県から、アユ資源の増殖を目的として特別採捕の許可を得ています。



採捕アユの放流先

実際の採捕は、稚アユの遡上開始に合わせて、写真のように魚道を遡上する稚アユに対して採捕カゴを設置して行います。採捕の最盛期は5月～6月です。この時期、漁協は、採捕した稚アユを、阿木川、岩村川上流の他、漁協管内の恵那市、中津川市の河川に放流しています。平成27年度の採捕実績は、約750kgでした。

アユの遡上は7月以降も続きますが、漁協の業務繁忙期に重なるだけでなく、水産資源保護の観点や出水の恐れが高くなることも勘案して、7月初めには採捕カゴを撤去しています。

採捕カゴの設置前後に魚道を遡上したアユは、阿木川、岩村川を遡り、貯砂ダムによって生成された砂礫河床を産卵床として利用しています。

(3) 産業発掘としての陸封アユ

放流したアユが、ひとたびこのような陸封アユとなれば、新たに河川に稚魚を放流しなくとも繁殖を続けるようになります。いわば陸封アユは、ダムができたことによる小さな産業発掘とも言えます。漁協でも、阿木川湖の陸封アユは地域の水産資源として貴重なものであり、維持・増殖が重要であると認識しているとのこと。

このような陸封アユは、水資源機構では、阿木川ダムの他、一庫ダムでも確認されています。



▲遡上する陸封アユ

採捕の様子▶